

英知としての諺・格言に潜在する教育視座（Ⅲ）

—超越的存在から示唆される生き方としての視座—

田中 亨胤

日常の生活世界で何げなく使っている「諺」「格言」には、意義深い「世俗的教育視座」が潜在している。本研究の「Ⅲ」では「Ⅰ」「Ⅱ」と同様に、『ことわざ』（大辞典）を基礎資料として、教育・保育の視座を可視化することに、研究の目的を置くこととする。「ことわざ」に内包されている複合的教育視座を俯瞰しつつ、「諺」「格言」に滲み出ている生き方への示唆を把握するものである。これによって「超越的存在」の響きを明らかにすることとする。

キーワード：超越的存在、生き方への示唆、納得の導き

I はじめに

一連の本研究「Ⅰ」（京都文教短期大学研究紀要第56集／2018年）および「Ⅱ」（京都文教短期大学研究紀要第57集／2019年）と同様の問題意識、課題の設定、資料収集方法等により、本研究の「Ⅲ」を進めるものである。日常生活で何げなく使っている「ことわざ」（諺／格言）は、自分の言葉では伝えきれない、語りきれない思いを、端的にして的確に表現してくれる。実に便利な借り物としての言語文化ツールである。感覚的にかつ理屈抜きに、その意味世界を納得してしまう。魔法の言語文化ツールである。「ことわざ」は、その人口に膾炙してきた背景（口承文芸）から、世俗的な言説であるからして、「ことわざ」はそのままにして科学的・学問的理論仮説として確定することには難しいところがある。さりとて「ことわざ」は、芸術的言語文化にとどまるものであるとも言い難い。

「ことわざ」の意味世界は、そのままを一般化して、真実として受け止めることには、要注意が求められる。それでいて過去からこれまでの素朴なる長い庶民生活を感じ取る貴重な資料と

なると考える。この意味で、「ことわざ」は、社会的文脈を潜在させた言語文化遺産の宝庫であり、現代にもつながる生きた重要な言語文化である。その表現方法においては、「比喩」「誇張」「反語」「掛けことば」など、多様である。「ことわざ」は、短い言語でもって語られるところにこそ、印象的なメッセージを発信しており、その意味は味わい深いものがある。受け止める側の、自らのこれまでの経験値や想像力に照らして受け止めることも有効であり、時には個人の域を超えた納得の真実となることもある。「ことわざ」に時代や風土などの背景を重ねることも、「ことわざ」のぶれない読み取りになる。「ことわざ」には、その語り継がれていくその時折の、必ずしも明示され得ない社会的風土が背景にあり、内包されていると思われる。

II 研究の目的

1. 問題の所在

本研究の「Ⅰ」「Ⅱ」と同じ本研究「Ⅲ」においても、『ことわざ』（大辞典）を基礎資料¹⁾として、「ことわざ」に潜在する経験値的・世俗的

「教育視座」を素描するものである。「ことわざ」は、必ずしも学術的言語文化ではない。この点からして、論理的かつ明快なる訴求力でもって、「ことわざ」に内包されているのであろう教育視座や生き方の視座を可視化し、断定的に教育理論あるいは人生訓との対応を確定することには、相当なる勇気と難しさがある。さりとて陳腐なることとして脇におくことも否定することもできないのではなからうか。

「ことわざ」の意味世界には、論理的かつ資料(エビデンス)には飛躍するところもありつつも、学術的に解き明かされ、提唱されてきたさまざまな教育理論仮説や哲学的理論と共振するところも多々あることも興味深い研究の課題である。

2. 研究の目的

本研究「Ⅲ」の「英知としての諺・格言に潜在する教育視座」では、これまでと同様の上記に示す問題の所在をふまえ、主として次の点を明らかにすることを、研究の目的とするものである。「ことわざ」に潜在している教育視座を可視化することである。なお、補足的にこれまでに学術的に解き明かされ、提唱されてきた教育理論との接点なり関係性を把握することにも、本研究の目的を置くこととする。これら2つの目的を探究することによって、「ことわざ」は、経験値としての「世俗的教育視座」にとどまるものではなく、「持続可能な教育視座」であることも指摘することとする。

なお、「本研究課題(Ⅲ)」の本稿では、副題として示す「超越的存在から示唆される生き方としての視座」に照準を置いて、「ことわざ」を抽出し、意味世界を整理することにより、「ことわざ」に内包されている教育および生き方の視座を明らかにすることを目的とするものである。

Ⅲ 研究の方法

1. 基礎資料

○基礎資料名：「北村孝一・監修『故事俗信ことわざ大辞典』(第二版)、小学館、2012年」(基礎資料は、1982年に第一版発行。第二版は、第一版を全面的に改訂。)

○基礎資料の概要

「基礎資料」は、(株)小学館創立九十周年にあたる2012年に「小学館創立九十周年記念企画」として発行。日本の「ことわざ」、中国に起源を持つ「故事成語」、西洋から入ってきた「ことわざ」、日本各地の「俗信」などを集大成。実際に文献上に現れた使用例を、原則として近世以前に限って掲載。収録項目数は、約43000項目。監修は、北村孝一氏。編集委員として、佐竹秀雄・武田勝昭・伊藤高雄の三氏が参画。

2. 資料分析条件

本研究課題は、継続研究として設定するものである。教育理論の大枠としては、「子どもの存在・概念」「環境を通しての教育と育ち」「知的好奇心から生まれる学習意志」「互い関係の中でのコミュニケーションの生成」「家庭生活と親子関係」「生涯発達と育ち・学び」等を想定している。「ことわざ」に内包するこれらの教育視座を把握し、論究するものである。それぞれの視座は、個別でありながら、相互に関連し合うものである。このことから、分析事例としての資料活用においては、これまでと同様に、「ことわざ」の重複使用を排除しないこととする。

本研究「Ⅲ」の位置づけを明確にするために、一連の研究をレビューしておくこととする。本研究「Ⅰ」では、そのうちの「子どもの存在・概念」に照準をおいて、研究目的にそって論究を試みた。本研究「Ⅱ」では、「環境を通しての教育と育ち」に照準を置くこととし、副題に示す

「モデリング：modeling」（コード：MD）と「ミラー・ニューロン：mirror-neuron」（コード：MN）をはじめ、「環境影響」（コード：EI）および「愛着・親しみ」（コード：AF）をキーワードとして、「ことわざ」事例を分析し、その結果について論究した。「ことわざ」の事例抽出においては、基本的には『基礎資料』に基づくものとするものの、『基礎資料』に掲載されていない人口に膾炙する一般に用いられている「ことわざ」も若干ではあるが追加した。

本研究「Ⅲ」では、その副題に示す「超越的存在」の概念を構成するキーワードとして、「神」「仏」「天」「時」「日光」「法（ほう・のり）」「世」「地蔵」等から言い表されている事例項目をリストアップし、それぞれの項目において共通理解されている意味世界を把握し、組み込まれている視座について論究することとする。「超越的存在」を教育理論仮説あるいは教育視座を可視化するには、これまで取り上げた「Ⅰ」「Ⅱ」における把握の難しさを超えた難しさもある。「神」「仏」「天」「時」「日光」「法」「世」「地蔵」などを手がかりとした分析を試みるものとするものの、いずれも具体像を想定した「言説」ではないからである。極論すれば、「曖昧さ」でもって、誰しものが納得してしまう「言説としてのことわざ」である。

3. 資料分析手順

○五十音順見出し項目に基づく掲載の43000項目から、本研究「Ⅲ」の課題に関連する「ことわざ」の抽出

○『基礎資料』に基づき、各「ことわざ」の意味世界の概要把握（意味の解説）

○「ことわざ」例に記載された観点のキーワード化とコード登録

それぞれのキーワードについては、以下のよ

うに「コード」を設定・付与し、事例として例示の「ことわざ」の末に、（ ）内に該当コードを登録した。

「神」：G (God) 「仏」：B (Buddha)

「地蔵」：J (Jizo) 「天」：H (Heaven)

「日光」：S (Sunshine) 「時」：T (Time)

「法」：L (Law Reason)

○各「ことわざ」の読み取りに基づく視座の可視化

Ⅳ 資料分析

1. あ～お欄

「あ」欄においては、20事例を抽出した。象徴的な「ことわざ」を例示すると、次のようになる。

○「吾が仏尊し」：自分の尊敬するものは、何が何でも尊い。（自分の信仰や信念を大事にするあまり、他を顧みないこと）（B）

○「朝神主夕坊主」：朝、神主に会い、夕方、坊主に出会うのは縁起が良い。（G/B）

○「朝観音に夕薬師」：観音には朝に詣で、薬師には夕方詣でるものである。（信仰の風習）（B/G）

○「朝鉢は弘法様」：朝来る托鉢僧は弘法様だと思っただけにすべきである。朝坊主は縁起が悪い。（B）

○「天の下を逆さまになす」：天地をひっくりかえす、ひっくりかえる。現実にはありえないこと。できないこと。（H）

○「安心決定」：阿弥陀仏の誓いを信じて一片の疑いも無いこと。ある信念を得て心が動かないこと。先の見通しが確定して少しも不安のないこと。（B）

○「安心立命」：儒教では、人力を尽くしてその身を天命に任せ、どのような場合にも落ち着いていること。天から与えられた使命を知って心

を平安に保ち、くだらないことに心を動かさないこと。仏教では、「安身立命」（あんじんりゅうみょう）。禅宗で、悟り境地に到着して真の心の安らぎを得て、主体性を確立すること。(B)

○「衣鉢を継ぐ」：師からその道の奥義を受け継ぐ。前人の事業を受け継ぐ。「衣鉢を伝える／伝う」(B)

○「いらざる僧の腕立て」：僧侶に腕力は不必要である。よけいな、不似合いなことをすることのたとえ。「法師の軍ばなし」「いらぬ僧の腕立て」(B)

○「鱈の頭も信心から」：鱈の頭のように他人からみるとつまらないものでも、これを信仰する人にとっては大切なもので、信心しだいで不思議な力を持つ。(G)

○「氏神様の森が枯れると氏子が枯れる」(G)

○「氏神のように思う」：氏神に祈るように、心から頼みとする。(G)

○「臆病の神降ろし」：臆病者が神々の名を唱えて加護を祈ること。(G)

○「お釈迦様が還俗なさっても」：「決して」「絶対に」など、強調しているたとえ。(B)

○「お釈迦様でも御存知あるまい（気がつくまい）」：「誰も知らないだろう、気がつかないだろう。」など、強調しているたとえ。(B)

○「お釈迦様の生まれ変わり」：普通の人とは異なる特別な人。普通以上に慈悲深く、性格のよい人。(B)

○「お釈迦に経を聞かせる」：知りつくしている人に、その事を説き聞かせる愚かさのたとえ。(B)

○「お天道様に石」：天に向かって石を投げれば、かえって自分に当たるように、他人に害を加えようとする、かえって自分がひどい目にあう。自分から不幸を招くことのたとえ。天に向かって石を投げてもとどかないように、とうてい及

ぶはずがないことのたとえ。「天に唾」「お天道様にごうろ（石片）」も類似。(H)

○「(お) 天道様人殺さず」：天は慈悲深いので人を見捨てることはない。天の慈悲が広大なことをいう。(H)

○「お百度を打つ（上げる）」：祈願のためにお百度参りをする。「お百度を踏む」も類似 (G/B)

2. か〜こ欄

「か」欄においては、19事例を抽出した。象徴的な「ことわざ」を例示すると、次のようになる。

○「神ならぬ身」：全知全能の神ではなく、能力に限りのある人間の身。いたらぬ人間の身。凡夫の身。(G)

○「神に三熱の苦しみあり」：神は衆生のために苦しみにじっと耐えている。(G)

○「神の国は汝らの中にあるなり」：天国は各人の信仰の中にある。(「新訳聖書」)(G)

○「神の綱も仏の綱も切れ果つる」：神や仏の助けを期待できなくなること。神仏に見放されること。(G/B)

○「神の鳥居の二柱」：神社の鳥居が二本の柱で立つように、人間も互いに力を合わせていくべきである。(G)

○「神のない堂へ詣ったよう」：自分の希望した目的物が見当たらないさま。真の目的が達せられないことのたとえ。(G)

○「神の神庫（ほくら）の梯のままに」：高く近寄り難いところでも、梯子をかければのぼれる。どんな困難なことでも、適切な手段を用いれば成し遂げることができるというたとえ。(G)

○「神は高運の凡夫を救う」：運の強い者には神の救いがある。(G)

○「神は正直」：神は正しい者を賞し、悪い者には罰を下し、公平で、曲がったことはしない。

(G)

○「神は正直の頭に宿る」：神は正直・誠実な人をお守りになる。「正直の頭に神宿る」も類似。

(G)

○「神は人の敬うに依って威を増す」：神は、神自体の尊さもさることながら、信仰し敬う人があるので、さらに威光を増すものである。(G)

○「神は非礼を受け入れず」：神は礼に外れたことばや物は受け入れない。道理にはずれた祈願をする目的で神をまつても、神はその心をお受けにならない。(G)

○「神は招く所に来る」：神を信じる人には神の加護がある。(G)

○「神は見通し」：神はどんな小さなことでも見ている。神はなんでもご存じであるから、ごまかすことはできない。「神仏は見通し」も類似。「神も御存じない」は反意。(G/B)

○「神へ物は申しがら」：神に祈願するのにも、申しようがある。真心こめて祈願すればよいはずなのだが、やはり祈願の仕方の巧拙による違いもある。何事にも言い方ややり方があるというたとえ。(G)

○「神も仏もない」：慈悲を垂れて下さる神も仏もない。無慈悲、薄情なことのたとえ。血も涙もない。／神も仏も眼中になく、ただそのものだけが大切である。大事にし、尊敬する対象がそれ以外にはないこと。(G/B)

○「神も仏も皆心」：神や仏はほかに存在するのではなく、人の本性そのものななかにある。(G/B)

○「神様にも祝詞」：神様はすべてを見通すとはいっても、やはり祈りのことばを示さないと願いは通らない。(G)

○「神棚に上げた水を飲めば病気が治る」(俗信)：神力がのりうつって病気が治る。(G)

3. さ～そ欄

「さ」欄においては、14 事例を抽出した。象徴的な「ことわざ」を例示すると、次のようになる。

○「地蔵と閻魔は一」：地蔵菩薩は慈悲を、閻魔は忿怒をあらわすが、ともに阿弥陀仏の分身である。(J/B)

○「地蔵と年寄りの世の中」：慈悲深い、温和な顔が世の中を渡るのにはよい。(J)

○「地蔵の顔(面)も三度」：柔和で慈悲深い地蔵菩薩も顔を何度もさかなでされれば腹を立てるようになる。「仏の顔も三度」も類似。(J/B)

○「地蔵の十福」：地蔵尊を信仰すると授けられるという 10 種の福德。(J)

○「釈迦に経」(釈迦に説法)：釈迦に対して仏法を説くように、あることを知り尽くしている人に向かって未熟な者が教えること。「釈迦に説法孔子に語道」も類似。(B)

○「正直の頭に神宿る」：正直な人には必ず神が味方をしてくれる。「神は正直の頭に宿る」も類似。(G)

○「神仏に上げた水で目を洗うと眼病が治る」(俗信)：神仏の力がのりうつって病気が治る。「神棚に上げた水を飲めば病気が治る」(俗信)も類似。(G/B)

○「神仏の格子に左手の指にて紙片を括れば知恵が深まる」(俗信)：神仏の力 (G/B)

○「神仏の前では主と下人の隔ては無い」：神や仏に対しては人の身分の上下などは意味を持たない。(G/B)

○「神仏は見通し」：「神は見通し」も類似。(G/B)

○「神仏をたたき回して自他ともに生きてがるも愚痴」：鉦をたたいて仏に念じたかと思うと、かしわ手を打って神を拜んで、延命息災を祈るのも、しょせんは人の愚かさを示すだけである。

(G/B)

- 「神明愚人を罰す」：神は、愚かな者に対してこらしめのために罰を与える。(G)
- 「神明に横道無し」：神が道にはずれたことを行なうことはない。(G)
- 「神明は正直の頭に宿る」：神は正直な人に加護を垂れる。「正直の頭に神宿る」も類似。(G)

4. た〜と欄

「た」欄においては、62事例を抽出した。象徴的な「ことわざ」を例示すると、次のようになる。

- 「民の声は神の声」：民衆のいうことは神の意志である。真理は世論にある。「天声人語」「天意」も類似。(G/H)
- 「天から降った災難」：予想もできないような思いがけない災難。要因が人間などによるものではなく、自然に起きた災難。天災。(H)
- 「天から牡丹餅」：天から牡丹餅が落ちてくる。思いがけない幸運に会うこと。勞せずしてよい目にあうことのとえ。「棚から牡丹餅」も類似。(H)
- 「天から横に降る雨は無い」：もともと雨はまっすぐに降るもので横に降る雨などはない。人間も生まれつきまっすぐなもので、けっして曲がったものではない。人間の性は本来善であることをいう。(H)
- 「天之に年を仮す」：天が寿命を貸し与えてくれる。一つの物事を成しとげるだけの寿命を保つ。長生きをする。(H)
- 「天定まって人に勝つ」：邪悪非道な人間が一時は栄えることがあっても、やがて天運が常態に復すれば自然の理(天理)に従って悪は滅び、善が栄えるようになる。人力の天に及ばないことをいう。(H)
- 「天、二物を仮さず」：天は一人の人間に特別

な物をいくつも与えはしない。よいところばかりそろった人はいないものだ。(H)

- 「天知る地知る我知る人知る」：誰も知るまいと思っても天地神明が知っており、私もあなたもそれを知っている。不正・悪事はいつかは必ず露呈するものだ。(H)
- 「天と誓文」：天に向かって、自分の言うことに嘘はないと誓うこと。(H)
- 「天と地」：二つのもの間に大きな隔たりや違いのあるさまのとえ。「月とすっぽん」「雪と墨」なども類似。(H)
- 「天に仰ぎ(憧れ)地に伏す」：天を仰いだり、地につつ伏して悲嘆にくれたり、懇願したりして身もだえする。悲嘆の痛切なさま。(H)
- 「天に網が被さる」：天罰を受ける。法網は逃れ難く、必ずその罰を受ける。「天の網」も類似。(H)
- 「天に偽りなし」：天は公明正大でいささかの虚偽もない。天道は厳正である。(H)
- 「天に口あり地に耳あり」：秘密や悪事はすぐ漏れるというたとえ。「天に口」「壁に耳あり」も類似。(H)
- 「天に口なし人を以って言わしむ」：天はものを言わないが、天意は人の口を通して世に広まる。世間で言われていることは、天意に基づく真実である。「民の声は神の声」も類似。(H)
- 「天に従うものは存し天に逆らうものは亡ぶ」：天の理に従うものは存続し、逆らうものは滅亡する。すべては天の理によるものだ。(H)
- 「天に私覆(しふく)無く地に私載(しさい)無く日月私照(じつげつししょう)無し」：天は万物を覆って、特定の個人のみ覆うようなことはせず、地は万物を載せ、日月は万物を照らし、特定の個人を載せたり照らしたりすることはしない。天地日月は普遍で、不公平なことはしない。(H)

- 「天に唾す」：天に向かって唾を吐けば、その唾は自分の顔に落ちてくる。他人を陥れようとすれば、かえって自分自身がひどい目にあうことのたとえ。「天に向かって唾を吐く」も類似。(H)
- 「天に橋をかける」：天に向かって橋をかける。達成し難い望みをもつことのたとえ。「雲に梯」も類似。(H)
- 「天に眼」：天にも目があって人の行ないをよく見知っている。天は、人の密事・悪事などを一つとして見のがすことはない。「壁に耳」も類似。(H)
- 「天に耳なしと雖も之を聞くに人を以てす」：誰にも知られないで済む密事というものはない。天に耳はないが、必ず誰かの耳にはいつて、自然と隠し事は世間に漏れ広がるものである。(H)
- 「天に向かって唾を吐く」：「天に唾す」も類似。(H)
- 「天の与うる取らざれば返ってその咎めを受く」：天が与えてくれるものを素直に受け取らなければ返って天の咎めを受ける。天が与えてくれた好機を逸するとわざわざを我が身に受けることになる。(H)
- 「天の網」：悪事をした報いはとうてい逃れることはできないというたとえ。(H)
- 「天の聞く事雷の如し地の見る事稲光の如し」：天が物事を聞き知ることはまるでとどろく雷鳴のようにはっきりしており、地が物事を見通すことはまるで輝く稲妻のように明白である。天は人の所行をすべて知っており、その善悪によって直ちに応報を下す。(H)
- 「天の支うる所を壊る可からず」：天の支持するものは人力の如何をもってしても破壊できない。天命には抗し得るものではない。(H)
- 「天の配剤」：天の行なう薬の配合。天は、善

- には善を、悪には悪の、所行に対するそれぞれの応果を配するものだ。(H)
- 「天の眼」：人の行ないの善悪・正邪を監視している「天の目」。(H)
- 「天の善し悪し三日いわざる者は長者となる」：天道に従順で、不平も言わず熱心に働く者は長者になる。(H)
- 「天は二物を与えず（下さず）」：天は一人の人間にいくつもの才能を与えることはない。一つの才能に秀でている者は、往々にして他に欠点が出るものである。(H)
- 「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」：人間は生まれながらに平等であって、貴賤・上下の差別は無い。(H)
- 「天は誠の鏡」：天は人の誠を正しく照らし出す鏡のようなもの。天道には偽りが無い。(H)
- 「天は自ら助くる者を助く」：天は、他人の助けを借りずに自ら努力する者を助ける。自立して努力することの必要。(H)
- 「天は見通し」：天は善悪や正邪を何一つ見落とすことなく、すべてを見通している。「神は見通し」も類似。(H)
- 「天は災いを降し祥を布き並びに其の職る所有り」：天は世の中に災いをくだしたりおめでたいことを生じさせたりするが、それは善には福を、悪には災いをと、はっきりした根拠があるからである。(H)
- 「天を仰いで唾する」：「天に唾する」「天に向かって唾を吐く」も類似。(H)
- 「天を恨みず人を咎めず」：我が身の不遇を天に向かって恨んだり、人のせいにして咎めたりしてはならない。すべての原因は自分の未熟・過失などがあると反省し、さらに修養努力を重ねる。(H)
- 「天を敬し人を愛す」：天を敬い、人々を自分と同じように愛する。「敬天愛人」(西郷隆盛)と

同じ。(H)

○「天地は一物の為に、其の時を枉げず」：自然の運行はまげることができない。(H)

○「天地は万物の母」：天地は万物を生成するもとである。(H)

○「天道諂(うたが)わず」：天の道、天地自然の道理はうたががなくはっきりしている。(H)

○「天道畏るべし」：天の道は恐れうやまうべきである。(H)

○「天道還るを好む」：天は根本に戻ることを好む。悪事を行なえば必ずその報いがあることをいう。(H)

○「天道次第」：自然のなりゆきに任せること。運次第。「天道様次第」に同じ。(H)

○「天道ぞ」：天道に誓って、自分の行動、ことば、考え、判断などが確かであることを強調するときに使う。確かに。誓って。神かけて。(H)

○「天道に偽りなし」：天の道、天地自然の道理に嘘偽りは無い。「天道に親(しん)なし」に同じ。(H)

○「天道に依こなし」「天道に私なし」：天道は公平でえこひいきが無い。(H)

○「天道のあてがい」：天からあてがわれたもの。天の与える運命。(H)

○「天道は謙に祐(さいわい)す」「天道は盈(み)てるをかきて謙に益する」：天は満ち足りておごる者からは削り取り、謙虚である者には増し与える。(H)

○「天道は正直」：天道は正しく、嘘偽りが無い。「天道に偽りなし」「天道様は正直」も類似。(H)

○「天道は善に与す」「天道は善に福し淫に禍す」：天は善人には幸福を与え、悪人には禍を下す。(H)

○「天道は足らざるを補う」：天道はその不足しているところを補い、すべて円満で満ち足りるようにはかるものである。(H)

○「天道人を殺さず」：天は慈悲深くて人を見捨てることはない。天の慈悲の広大なこと。(H)

○「天道へ石を投げるよう」：「天道様へ石投げ」「天を仰いで唾する」に同じ。(H)

○「天道誠を照らす」「天道様は誠を照らす」：天は人間の誠意をそのままにしておかず、いつか必ず衆目の認めるところとしてくれる。(H)

○「天道様とすっぽんほど違う」：大変な違いがある。比較にならないほど差がある。「月とすっぽん」も類似。(H)

○「天罰靦面」：天は悪事を見逃さず、天罰がすぐ現れること。悪いことをすれば必ず罰が下る。「天罰は当たり次第」も類似。(H)

○「時移り事去る」：時代とともに、いろいろな事が移り変わる。(T)

○「時極まれば転ず」：時運は、その極点に達すると、新たな方向へ転回する。(T)

○「時異なれば事異なり」：時とともに事態はさまざまに変化し、それに対処する方法も効果も異なる。(T)

○「時の氏神」：ちょうどよい時に現れて、その場をとりまとめてくれる非常にありがたい人。仲裁は時の氏神。挨拶は時の氏神。(T/G)

○「時は金なり」：時間は大切なものであり、金銭と同等の価値がある。時間を無駄に費やしてはならない。時間を大切に努力すれば、いつか成功し富みも得られる。(T)

5. な～の欄

「な」欄においては、6事例を抽出した。象徴的な「ことわざ」を例示すると、次のようになる。

○「日天様掛けて」：お天道様に誓って、お天道様に願って。(H)

○「のの様次第」：神仏の思し召し次第。自然のなりゆき任せ。運任せにすること。「天道次第」

も類似。(B/G)

- 「法の海」：仏法の広く深いこと。(B/L)
- 「法の薪」：仏法が人を利益すること。蒔きの火が人を温めるのにたとえていう。(B/L)
- 「法の灯火」：仏法。闇を照らす灯火にたとえていう。師から弟子へと伝えられる法脈。(B/L)
- 「矩をこえる」：きまりからはずれる。天の法則にそむく。分を超えたふるまいをする。(L)

6. は～ほ欄

「は」欄においては、28 事例を抽出した。象徴的な「ことわざ」を例示すると、次のようになる。

- 「光をつつむ」：すぐれた知識・才能をかくして俗人と交わる。自分のすぐれた点を知られないようにする。(S)
- 「光を放つ」：光を出して輝く。ひととき目立つ。すぐれた素質を周囲に示す。(S)
- 「光を和らぐ」：威徳・才能・知恵などの輝きを包隠して、仮の姿を現す。(S)
- 「光を和らげ塵に同ず（塵となす）」：すぐれた学徳や才能を秘して、世俗に交じり合う。仏菩薩が威徳の光を隠し、衆生を救うため、仮の姿を現す。(S/B)
- 「仏祖掛けて」：仏祖に誓って、きっと。絶対に。(B)
- 「仏頭に糞を塗る」：貴重で尊敬すべきものに、汚点を加えることのとえ。(B)
- 「法あっての寺、寺あっての法」：仏法があるからこそ寺があり、寺があるからこそ仏法も維持される。仏法と寺は切り離すことができないこと。(B)
- 「法あって法なし」：法を十分に理解してしまえば、法に束縛されることはない。行動が自然に法にかなったものになること。(L)
- 「菩薩は実が入れば俯く」：稲は実るに従って

稲穂を垂れる。人も内容のある人ほど頭が低く謙虚である。「実るほど頭を垂れる稲穂かな」も類似。(B)

- 「菩薩の鹿招けども来たらず」：人が鹿を呼んでも鹿は恐れて近づこうとしないように、菩薩のなかなか得難いことのとえ。(B)
- 「仏疑うは罪深し」：仏法の教えを疑うのは罪深いことである。(B)
- 「仏誓文神正直」：神仏には偽りが無い。(G/B)
- 「仏千人神千人」：世間には悪魔だけでなく、神仏も多い。世間には善人も多いことのとえ。(B/G)
- 「仏頼むよう」：仏に願いをかけるよう。人に対してきわめていいに依頼するさま。(B)
- 「仏頼んで地獄へ墮ちる」：頼みになると思ったことが反対の結果になること。不本意な結果を得ることのとえ。(B)
- 「仏造って魂（眼）入れず」「仏造っても開眼せねば木の切れも同然」：仏像を作っておきながら魂を入れ忘れるように、物事をほぼ成就するところまでいきながら最も肝心な点が抜け落ちていることのとえ。(B)
- 「仏無き世には羅漢を仏の如くし、羅漢無き世には破戒無知の僧形を尊む」：仏の無い時代には羅漢をそのかわりにあがめ、羅漢すらない時代には僧の姿でさえあれば破戒僧でも無学な僧でも尊びうやまう。どのような時代でも、人々の心は強く仏法にすがろうとするものだ。(B)
- 「仏刻めば木も験あり、神に祭れば石も崇る」：ただの木材でも仏像に彫れば霊験があり、ただの石でも御神体にすれば神威をあらわす。信心によってありがたく思われる。「鯛の頭も信心から」も類似。(B/G)
- 「仏に妄語無し」：仏のことばには、嘘偽りが無い。(B)

○「仏に蓮華」:「鬼に金棒」に同じ。絶大なる力になること。(B)

○「仏のある地獄」:世の中は無情に見えても、慈悲・人情はどこへ行ってもあることのとえ。「地獄にも知る人」「渡る世間に鬼はいない」も類似。(B)

○「仏の顔に糞を塗る」:尊いものを汚す。よいものに悪いもの、汚いものを添えることのとえ。「仏塔に糞を塗る」も類似。(B)

○「仏の顔も三度」:仏様のように優しく穏やかな人でも、面と向かって顔を撫でるような無作法なことを繰り返されては怒り出す。これまで大目に見てきたことも、度重なればただではすまないということのとえ。「地藏の顔も三度」「仏の顔も三度ながむれば腹が立つ」「仏の顔も三度撫ずれば腹立つ」「仏の顔も二度三度」も類似。(B/J)

○「仏の心凡夫知らず」:仏の寛大な慈悲の心を知らずに、凡夫は愚かしいことばかりするものだ。(B)

○「仏の無い堂」「仏も無き堂へ参る」:本尊の無いお堂で仏に祈る。目的にかなわないことをするたとえ。(B)

○「仏の箔こそげる」「仏の箔を剥ぐ」:欲に絡んで仏像の金箔を剥ぎ取る。利欲のために非道の行ないをすることのとえ。「仏の目を抜く」も類似。(B)

○「仏の前の経を言う」:仏を前にして経を説く。知り尽くしている人にその事を教える愚かさのとえ。「釈迦に説法」も類似。(B)

○「仏は見通し」:ごまかしがきかないこと。「神は見通し」に同じ。(B)

7. ま～ん欄

「ま～ん」欄においては、1事例を抽出した。象徴的な「ことわざ」を例示すると、次のよう

になる。

○「無法の法」:特に法則を設けなくても、自然に法則が備わっていること。(L)

V 研究の結果と考察

本研究「Ⅲ」における分析の視点は、「資料分析条件」として示し、研究課題の副題においても示すキーワードである。事例として取り上げた「ことわざ」には、それぞれに該当するコードを付している。以下、資料分析の結果を基に、「ことわざ」に込められている意味世界を素描することとする。

1. 「あ～ん」の各欄の事例数

「ことわざ」の抽出にあたっては、「超越的存在」から示唆される積極的メッセージを意味世界に内包するものについて限定した。この条件に基づく「超越的存在」として想定したキーワードに関するものは、総数として、「150事例」を抽出した。各欄の内訳については、次のような事例数の結果を得た。

「あ～お欄」:20事例 「か～こ欄」:19事例
 「さ～そ欄」:14事例 「た～と欄」:62事例
 「な～の欄」:6事例 「は～ほ欄」:28事例
 「ま～ん欄」:1事例

なお、言い回しの違いはあるものの、各キーワードに関連する「ことわざ」に潜在する意味世界には共通するところもあり、類似する「ことわざ」も散見される。関連すると判断した「ことわざ」は、各事例中に付記し、「ことわざ」事例表示の調整を行なった。

2. 各キーワード別事例数

想定した7つの各「キーワード」の「ことわざ」事例については、次のような事例数の結果を得た。なお、「ことわざ」によっては、キーワー

ドの重複登録をしている。キーワードの総登録数は「175 事例」である。

- 「神」：G (God)：41 事例
- 「仏」：B (Buddha)：53 事例
- 「地蔵」：J (Jizo)：5 事例
- 「天」：H (Heaven)：61 事例
- 「日光」：S (Sunshine)：4 事例
- 「時」：T (Time)：5 事例
- 「法」：L (Law Reason)：6 事例

上記の事例は、「超越的存在」から、我々人間の生き方に関わるある種の警鐘をならすメッセージを潜在させた「ことわざ」を条件とした抽出事例である。175 事例のうち、「天」「仏」「神」が 155 事例となっており、約 89% を占めている。いずれも、我々の日常生活や暮らし、あるいは生き方のモラル・スタンダードの言説として人口に膾炙しているものである。

3. 各キーワードの類型と意味世界

上記 7 つのキーワードの意味世界は、次の三つの類型によって、把握することとする。

- 第一類型：「神」「仏」「地蔵」
- 第二類型：「天」「日光」
- 第三類型：「時」「法」

第一類型は、超越的存在の中でも、代表的な存在概念である。「神」「仏」あるいは「神仏」としての「ことわざ」群である。類型群には、「神仏」の化身でもある「地蔵」を位置づけている。いずれも人間世界に近い存在でありながら、世俗的人間の為せる業を超えた「感化力」「影響力」「説得力」「人生の道標」等について、反論や異議の余地無く、そのままにおいて受け止めてい

く「納得の導き」を示す「ことわざ」群である。我々の日常の生活世界に定着した「ことわざ」群でもある。

なお、この第一類型の「ことわざ」のキーワードである「神」「仏」「神仏」「地蔵」にかかわる「ことわざ」の中には、「超越的視座」を否定し、あるいは揶揄するものも少なくない。これらについては、「ことわざ」事例としては登録していない。

第二類型は、人間の化身ではなく、自然界の現象を超越的存在として受け止める「ことわざ」群である。「天」をはじめ、「日光」に代表されるものである。人間の力では御し難く、人智を超え、及ばないがゆえに、無批判に納得する「ことわざ」群である。「天」には「神」や「仏」の存在と重ね合う「ことわざ」もある。なお、「天」については、「天主」や「国を治める支配者」として示す「ことわざ」もあるが、これらの「ことわざ」については、第二類型からは除外している。「日光」は、自然現象としての「太陽光線」に限定されない神格された受け止めとしての「ことわざ」になっているものについて、第二類型に位置づけた。

第三類型は、世俗的な人間生活にあって、その節度の基本姿勢を示す「ことわざ」群である。事例数としては合算しても 11 事例となっており、第一類型および第二類型と比較して、きわめて少ないものの、「ことわざ」群の事例からは、人間としての振る舞いに求められる王道の視点が示されている。

4. 「超越的存在」に潜在する生き方の視座

本研究「I」で取り上げた「子ども存在・概念」では、「ことわざ」事例に内包されている意味世界を「子煩悩的な子ども像」として把握した。子どもの「無邪気さ」「無欲」「純粹さ」な

どの「真綿」でもある概念でもって「子ども」を包み込む図式が想定されていることを指摘した。²⁾

本研究「Ⅱ」においては、「環境を通しての教育と育ち」に照準を置いて、これまでに面々と受け止められ続けてきた普遍的な教育的視座であることを把握した。³⁾

本研究「Ⅲ」では、これまでの一連の研究「Ⅰ」「Ⅱ」とは、とりわけ異なる視座の分析である。「教育・保育の視座」をも包含する「生き方の追求としての視座」に重点を置くものである。

日常的・世俗的に何げなく生活を送り過ぎている我々人間主体者に対する、刺激的、衝撃的とも思える警鐘的攻撃そのものとして、「超越的存在」としての「ことわざ」からのメッセージがある。我々人間の何げない無意識の「生き方の現実」のパラダイム変換の機会を仕掛けていると、受け止めることができる。ある意味では、「生き方」の180度の変換でもある「コペルニクスの転換（転回）」をも必要とされるメッセージである。

「超越的存在」としての「神」「仏」「神仏」「地藏」をはじめ、「天」「日光」「時」「法」を前にしては、有無を言わずに、それを受け止める人間のリフレクションを、「良心」を少しでも持ち合わせている我々人間に迫っている。「良心の呵責」に問いかけるメッセージである。そのメッセージにうなずき、生き方への軌道修正への一歩を誘発していくものであれば、それはまさに「良心の覚醒」⁴⁾ そのものであろうか。

この観点に照らせば、「超越的存在」としての「ことわざ」は、直接的ではないとしても「生き方の追求」視座を基盤にした「教育の視座」として受け止めることができると考える。

Ⅵ おわりに

素朴なる「ことわざ」には、必ずしも科学的ではない把握であるとしても、人間の英知としての揺るぎない先見性のある教育・保育視座および生き方の追求の視座が展望されている。本研究「Ⅰ」「Ⅱ」「Ⅲ」における「ことわざ」の事例分析から、その一端を明らかにすることができた。本稿においてとりあげた「超越的存在」の「ことわざ」の数々は、高齢者や家族など身近な人たちから伝えられる「一言」でもある。この点では、「超越的存在」を通しての「ことわざ」は、我々人間の生活や暮らし、あるいは生き方の日常にとっての「生きたことわざ」であり、指針のようにも受け止めることができよう。

本稿のキーワード事例では、限定的な事例抽出を行なっている。基礎資料である『故事俗信ことわざ大辞典』においては、「ことわざ」を網羅する観点から、「相反する」ものについても登録されている。「超越的存在」には現実的には二面性がある。「超越的存在」を冒瀆すると思われる「ことわざ」については、キーワード事例としての登録を排除した。これらの事例の分析については、今後の課題としたい。

注および引用文献

- 1) 北村孝一・監修『故事俗信ことわざ大辞典』（第2版）、小学館、2012年
- 2) 田中亨胤「英知としての諺・格言に潜在する教育視座（Ⅰ）—子ども存在・概念をめぐって—」京都文教短期大学『研究紀要・第56集』、33-44、2018年
- 3) 田中亨胤「英知としての諺・格言に潜在する教育視座—modeling & mirror-neuron—Ⅱ」京都文教短期大学『研究紀要・第57集』、1-11、2019年
- 4) 「良心の覚醒」は、ドイツの教育学者であるシュプランガー（Spranger, E. 1882-1963）が、著書『教育学的展望』において、教育の本質・仕組みとして示した、「発達の援助」「文化財の伝達」「良心の覚醒」の一である。（参照：シュプランガー／村田昇・片山光弘共訳『教育学的展望』、1987、投信堂）